はじめに

アレックス・カー

日本の文化には「表と奥」、「顕と密」のように、常に二つの要素が備わっているように思います。そこでは「表」より「奥」が、「顕」より「密」が、神秘的で深い意味を持つとされています。つまり、簡単に見ることができず、人目を少々忍ぶくらいのものの方が、すばらしいのです。

一九七一年に、白洲正子さんが『かくれ里』（新潮社）という本を著しました。当時は高度成長期の只中で、観光ブーム幕開けの時でしたが、彼女は金閣寺、銀閣寺などを避けて、主に山奥を巡り、あまり知られていない寺や神社から、日本美の神髄について思考を巡らせました。私は九四年に「本物とは何か」というテーマの対談で白洲さんと知り合って以来、彼女のものを見る厳しい目から、たくさんのことを教わりました。

私はこれまで古民家再生の仕事で、全国を走り回ってきました。それは、ほぼ僻地巡りの

日々だったといえます。加えて、この数年は白洲さんの跡を辿るように、神の力、仏の力とは何か、ということを考えながら、折あらば、かくれ里を探し歩くようになりました。

今日では「表」となる社寺や町並みには大勢の観光客が押し寄せて、特別感が薄れてしまっています。それゆえに、誰もが行けるところより、知る人ぞ知る、ちょっと隠れた場所が魅力的に感じられ、それを見つけた時に心は大きく癒やされます。

日本にはお遍路のように、何世紀も昔から「巡礼」の習慣があります。私にとっては、古民家再生も、かくれ里を訪ね歩くことも、どちらも一種の「巡礼」であり、その中で数々の発見がありました。

そのような隠された本物の場所を紹介したいという思いをもとに、私は二〇一七年から二年をかけて、あらためて「ニッポン巡礼」の旅に赴きました。ジャーナリストの清野由美さんと、写真担当の大島淳之さんと三人で、秋田の奥地、奄美大島の突端、伊豆諸島の青ヶ島と、長い時間をかけて辿り着く地は、文字どおり、現代の「かくれ里」といえるところばかりでした。

もう一つ、「かくれ里」とは「忘れ里」の意味もあると私は考えています。ですので、大津市の日吉大社と三井寺、山口県の萩市、東京近郊の三浦半島など、僻地でないところにも足を運びました。たとえば大津市は、京都市内から電車で十五分ほどという身近な場所です。秘め

られた長い歴史と、重要な文化が残る場所であっても、身近であるがゆえに、今日では訪れる人は意外と少ないものです。そのような場所は、簡単に行けるからこそ、歴史の彼方に埋もれてしまっているのです。

私の父は旅慣れた人であると同時に、ジョークを好んだ人でした。たとえば友人がイタリアに旅行したことを知った時には、次のようなやり取りを必ずしていました。

「チンクエテッレには行った？」「ええ」「では、マナローラには行った？」「ええ」……以下、海岸伝いの小さな町の名を次々と挙げていき、ついに「いいえ」という返事が来たら、「You missed everything！（だったら、君は何も見ていない！）」と、うれしそうに叫ぶのです。小さな漁村を見逃したことで、旅の真髄、最高の楽しみを得られなかったんだね、と相手を悔しがらせるのです。

名だたる観光地を訪ね歩いているという人でも、そこから少しはずれた場所は素通りしていることが多いものです。となれば、その人は日本の真髄を見逃しているのかもしれず、この本は読者に対して、父の問いかけのようなものになるかもしれません。

これから読者のみなさんと一緒に、巡礼に旅立ちたいと思います。その前に、白洲さんの言葉を紹介させてください。

「人が知らないところは、人に知らせたいし、知らせると、たちまち汚されてしまうのは、ままならぬ世の中だと思う」

私もまさに同じ気持ちを抱きます。ままならぬ世の中ゆえ、ここで紹介する場所には、ぜひとも行かぬよう、最初に心からのお願いを申し上げておきます。

目次

写真：八頭町 清徳寺の紅葉

はじめに　アレックス・カー ―― 3

1　日吉大社、慈眼堂、石山寺（滋賀県） ―― 13
山王鳥居／桃山の屋根／奥宮
日吉東照宮と慈眼堂／牛塔／石山寺

2　羽後町田代、阿仁根子（秋田県） ―― 33
土方巽と細江英公／「舞踏」の誕生
峠を越えて「鎌鼬」の村へ／舞踏と写真の聖地
里の一帯が美術館である／トンネルの先にある桃源郷

3　能登半島（石川県） ―― 55
「さとりの道」に誘われて／「自然」の生命力を残す空間

「無い」光景が最高の贅沢／三宅一生を彷彿させる棚田
絶景海岸／能登は裏ではない。「表玄関」だ

4　八頭町、智頭町（鳥取県） ―― 75

これこそが、日本に本来あった森の姿／石谷家は「住居版の東大寺」
豊かさの名残と新しい風／「草の屋根」の下で味わう山菜料理
廃れた集落に可能性がある

5　奄美大島（鹿児島県） ―― 97

日本元来の柔らかさがある原生林／「ジュラシック・ビーチ」の危機
数百年を経た古木が織りなす並木道／うれしさと恐怖

6

萩（山口県）

「西の京」の栄華を伝える五重塔／一六世紀と二〇世紀の庭を同時に見られる
小さな集落の文化／黄檗宗は江戸時代の革新思想だった
参道は「哲学の道」である／毛利家の廟所はパワースポット
白壁と水路と指月山／人の手が加えられていない山に「新緑」の豊かさがある
須佐ホルンフェルスを「東尋坊」にしてはいけない
海沿いの棚田と、変わらぬ姿の秋吉台

7

三井寺（滋賀県）

「山門派」延暦寺と「寺門派」三井寺の六百年抗争
桃山時代の建築物を味わう／天台密教というミステリー
狩野光信の襖絵と障壁画／フェノロサと三井寺
日本美術に魅せられた海外の巨人たち
円珍の霊力が美術コレクターを引き寄せる

8

南会津（福島県）

上質な「ツアー」は一冊の良書に匹敵する／浅草駅から東武鉄道で
里山から一望する「茅葺きの大波」／一九七〇年代まで眠り続けた宿場町
廃校の校舎を利用した「茅葺き教室」／国宝級の古材コレクション
手つかずの集落やお寺の風景／堂々たる曲家様式の農家
「木」も文化遺産である／珍しい仕掛けの芝居小屋

9

青ヶ島（東京都）

人々が頭に思い描く「幻の島」が実在する
「島流しの地から観光地へ」の流れに取り残されて
八丈島からフェリーで三時間。遠いがゆえに魅惑的なアプローチ
オアフ島を想起させる展望台からの絶景／地場産業の工場を訪ねる
原生林と焼酎の意外な関係／火山とともに生きる島の、苦難の歴史
「地方移住」の守り神がここにいる

10　三浦半島（神奈川県） ―― 221
「三崎ハウス」のアメリカ人コミュニティ／先駆的だった日米折衷デザイン
そして、三浦は記憶の底へ／半世紀ぶりに「三崎ハウス」探索へ
思い出の浜辺を発見する／劇的な崖に囲まれた入り江
オーバーツーリズム時代の「旅の哲学」

おわりに　清野由美 ―― 248

構成／清野由美
撮影／大島淳之、アレックス・カー
デザイン・文字組版／アイ・デプト.

1

日吉大社、慈眼堂、石山寺（滋賀県）

写真：日吉大社　奥宮から琵琶湖を望む

山王鳥居

「巡礼」を始めるにあたって、まずは自宅から近いところに行きたいと思い、比叡山麓の「日吉大社」を選びました。日吉大社には、神道におけるきわめて重要な歴史があることは知っていました。ただ、恥ずかしい話ですが、京都の亀岡に何十年も住みながら、私はこれまで一度も日吉大社に行ったことがありませんでした。

三月上旬の寒い日。早朝に亀岡を出て、琵琶湖畔に辿り着くと、幾重にも雲が重なった空から小雨が降り出してきました。日吉大社の参道を歩いているのは、私たちだけです。

境内に足を踏み入れると、まず独特なかたちをした鳥居に目を奪われます。鳥居は上部にピラミッドのような三角形が載り、宇宙的な造形です。「山王鳥居」と呼ばれるこのユニークなかたちこそが天台密教の聖地、比叡山と、日吉大社の歴史を物語っているものです。

さて、「神道」と聞けば、現代日本人の多くが思い浮かべるのは、明治以降の統制された神道でしょう。しかし、千数百年もの間、神道は仏教と混淆し、両者は複雑な関係を紡いできたのです。

山王鳥居

比叡山延暦寺は八世紀末に最澄が開創しましたが、その時、比叡山にはすでに山を守る神々が存在していたといわれています。最澄はそれらをひとまとめに「山王」と呼び、寺の守護神として祀りました。それが、日吉大社の始まりです。

天台宗が全国に広まるとともに、日吉の信仰も日本中に普及しました。現在、日吉系の分霊社は「山王」「日吉」「日枝」などの名前で、全国に三千八百社以上もあるといいます。東京・溜池山王駅近くにある「日枝神社」もその一つで、大きな山王鳥居が都心部にそびえ立つ光景を知る人も多いでしょう。

天台宗と日吉の神道は夫婦のような関係でありながら、残念なことに仲は円満とはいき

ませんでした。仏教の「本地垂迹説」によると、仏や菩薩が本来の存在＝「本地」であり、日本に現れた神＝「垂迹」は、その仮の姿だと解釈されています。これは、あくまでも仏教を優位にとらえた思想です。その思想の下で、延暦寺は日吉の神社群を長い間、支配し続けました。

京都から見て、日吉を含めた延暦寺は「鬼門（北東）」の方角に位置します。昔の人は、この地に荒々しい神霊がいると考えていました。比叡山の武装した僧兵は、その象徴でもあり、日吉大社でもたびたび、劇的な事件が起こりました。

江戸初期の一六八三年に、当時の神主たちが「本地垂迹」を徹底的に否定して、天台宗から自立しようとした事件は、その一つです。彼らは七つの社殿に安置されていた仏像や仏具類を持ち出して燃やしてしまいます。仏像を宗教的な理由で燃やす行為は、日本の宗教史上でも珍しいものといえます。

比叡山が日吉側の非を強く幕府に訴えた結果、神主たちは罰せられ、仏像などは復元されましたが、神主たちの仏教に対する怒りは、二百年後に起こる明治政府の仏教弾圧「廃仏毀釈」の伏線となりました。

廃仏毀釈運動では日吉大社に限らず、すべての神社から、仏教が強制的に切り離されました。

日吉での廃仏毀釈は特に過激で、この時に再び仏像類は社殿から引きずり出され、破壊される憂き目にあいました。その数は千点以上にのぼったと記録されています。明治以降は山王鳥居のてっぺんにある三角屋根も問題視され、しばらく取り外された後、一九一五年にようやく元のかたちに戻されています。

雨の中、周囲にまったく人がいない境内で見る日吉大社の鳥居は、静かで平和です。神仏習合の精神を宿した鳥居は、神秘的で威厳に満ちています。しかし、その背後には、複雑な宗教対立の歴史が秘められているのです。

桃山の屋根

境内をさらに歩いていきましょう。

ここの境内には、あちこちに社があり、どこから見ればよいのか、わかりにくくなっていますが、四十の社が点在し、その中心に「東本宮」と「西本宮」があると、とらえればいいようです。

私たちはまず、東本宮に向かいました。楼門をくぐると、檜皮葺（ひわだぶ）きの社殿群が現れ、それらの屋根が描く柔らかな線形は実に優美です。京都市内では、これほど美しい屋根にはなかなか

東本宮の屋根

出会えませんので、この優美さがどこから来ているのか気になりました。

一五七一年、織田信長の比叡山焼き討ちの際に、日吉大社も完全に焼き払われましたが、その後、豊臣秀吉により再建が果たされています。そのため、多くの社殿は桃山文化の絶頂期に建設されています。京都にもこの時代に建築された寺社は残っていますが、多くは社殿や堂宇一棟だけで、日吉大社のように複数棟が密集する眺めは稀です。

桃山時代のスタイルは、屋根だけではありません。本殿の回廊に座る獅子と狛犬も、桃山時代の彫刻のようです。現在、多くの神社では、石造りの獅子

や狛犬は参道沿いに置かれていますが、日吉大社では古い様式を守った、木製のものが、屋根の下に鎮座しているのです。

私たちは、東本宮から白山宮（しらやまぐう）、宇佐宮をお参りしつつ、西本宮に歩を進めました。西本宮も、その途中に並ぶ社殿、摂社も桃山時代の建築で、美しいものです。

けれども……。「優美」なはずの日吉大社でも、派手な字や真っ赤な矢印が描かれた看板が溢（あふ）れています。中でも、白山宮手前のクローム製の手すりは〝見事〟なもので、そのピカピカ、ギザギザしたかたちには、社殿の存在も霞（かす）むようなパワーがありました。

看板や手すりは少しの工夫で、周囲に馴染（なじ）んだ良いものができるのに、このような状況はもったいないと思います。

奥宮

日吉大社の数多い社殿の大半は、山の麓に位置していますが、大社が位置する八王子山の上に「奥宮」があります。そこでは、「金大巌（こがねのおおいわ）」と呼ばれる巨石がご神体として祀られており、

日吉大社 奥宮